

受 験 番 号				

座 席 番 号			

(試験開始の合図の後に記入)

成城中学校入学試験問題(第三回)

国 語

(配点一〇〇点)

令和七年二月五日 八時五〇分 — 九時四〇分

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子は全部で20ページあります。
- 3 解答には、必ず黒色えんぴつ(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 4 解答は、必ず解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
- 5 問題冊子、解答用紙それぞれの指定の欄に、受験番号と座席番号を記入しなさい。
- 6 解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号などを記入してはいけません。また解答用紙の余白および裏面には、何も書いてはいけません。
- 7 文字数の指定のある問題は、句読点などの記号も一字に数えます。
- 8 問題冊子の余白は、下書きに使用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 9 問題冊子、解答用紙どちらも持ち帰ってはいけません。試験終了後、必ず提出して下さい。

問題は次のページから始まります。

【一】 次の問いに答えなさい。

問 1 次の — について、漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。(ていねいにはっきりと書くこと)

- ① 木が燃えて炭になる。
- ② 白線にノって歩く。
- ③ ヒタイに汗がにじむ。
- ④ 自軍のブラウンを祈る。
- ⑤ 神社ブツカクをめぐる。

問 2 次の文章が正しく伝わるように、A C に入る言葉をあとのア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を用いないこと。

先週の日曜日、ぼくは図書館 A 行った。調べているとあつという間に夕方 B なったので、急いでバス C 帰った。

ア に イ を ウ の エ で オ へ

問 3 へ ー の場面での言葉遣いとして最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

〈駅のエレベーターで自分の後ろに並んでいたお年寄りに対して〉

- ア ぼくは階段で行きますので、どうぞお乗りください。
- イ ぼくは階段で行きますので、どうぞお乗りしてください。
- ウ ぼくは階段で行きますので、どうぞお乗りになられてください。
- エ ぼくは階段で行きますので、どうぞお乗りいただいでください。

問 4 次の文章は、ある生徒が書いた手紙の一部である。 — ア～エの中から、漢字の使い方や仮名遣いに誤りがあるものを一つ選び、記号で答えなさい。

小学校最後の試合で大敗したときのよう^アな^イはじめ^エな^ウ思いをもう二度としないように、部活動に一生懸命打ち込む毎日です。今月から始まった大会もおお^イず^エめ^ウを迎えています。小学生のときとは違^ウって、今では大事な場面を任^ウされるまでになりました。それもこれも先生の温かい言葉がはげみになったからです。

問 5 次の各文の に入る慣用表現として最も適切なものをあとのア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① よく というから、抜け道ではなく大通りで行くことにしよう。

② あの優秀な成城健児くんが漢字を間違えるとは、 だね。

ア 大は小をかねる イ 河童の川流れ ウ 急がば回れ エ 立て板に水 オ 口は災いの元

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

誤解してほしくないのですが、ぼくは、技術的な意味でのシンギュラリティ、つまり人工知能が人間の知能の能力を超えるときは来ると信じています。いま人間がやっていることは、ほとんど人工知能でできるようになるでしょう。

けれどもぼくは、それが人間の生きたを劇的に変えるとは思わないのです。

メディア・アーティストの落合陽一さんとの話をしたことがあります。人工知能が人間の知能を超えると、人工知能自体が自然界のデータをじかに集め、処理し、新しい理論をつくり、その理論をもとにテクノロジーを生み出す時代が来る。そうになると、人間は人工知能が理解している世界を理解できなくなつて、ただテクノロジーの恩恵を受けるだけになる。

① 落合さんはそれを人間の危機と感じていたようでしたが、ぼくは見かたが違っていました。というのも、ぼくにはそれは、人間のいままでのありかたとあまり変わっていないように感じられたからです。

人間はいまでも自然界を完全には理解できていません。メカニズムがわかっていないことが無数にある。そしてそんな理解できない自然の恩恵を受けて生きている。

そもそもぼくには、人間が自然を完全に理解できるという発想のほうがおかしく思えます。人間はたいへん小さな頭脳しかもっていません。計算速度も遅い。加えて動作期間はせいぜい100年くらいしかなく、記憶の移転もできない。こんな欠陥だらけの計算機が世界を理解できるわけがない。

② 歴史的に見れば、人間の脳が世界全体を理解できるといふ発想自体が、ここ300年か400年ぐらいのヨーロッパで生まれた幻想にすぎません。シンギュラリティの到来でその夢から覚めるのだとすればけっこうなことです。それは科学者のプライドを打ち崩すかもしれませんが、同じことは地動説や進化論のときも起きました。

ぼくの関心は、そのような技術の誕生で人間社会がどこまで本質的に変わるのか、人間の苦しみや悩みは消えるのかといった問題のほうにあります。その点では、とくに新たな展望は開けていません。

人工知能は産業構造を変えます。しかし社会の本質は変えません。これから5年、10年でその差異があきらかになつてくるのではないでしょ

うか。

なぜ社会の本質は変わらないのか。そこでまた訂正する力が関係してきます。

それは人工知能には担えません。むしろ、いまの人工知能は定められたルールにはとても柔軟にしたがうことができます。適切な目的さえ設定すれば、自分でルールを発見し、ルールの変更にも対応することができるよう。けれども、ここでは詳しく述べませんが、人工知能が身体をもたない以上、その対応にはどうしても限界が生じると考えられます。

人間の訂正する力の発露はじつに自由自在です。たとえば人間は、不毛な論争を打ち切るために、まったく関係のない身体的な行為を導入することがあります。

それはとても具体的で、身近なことです。論争で疲れたので一緒に酒を飲むとか、恋人同士であればスキンシップや性的な接触をもつとか、そういうことです。いっけんそれは言語ゲームと関係ないように思われるかもしれませんが、これもまた一種の訂正の行為です。そしてそのような接触によって、さつきまで続いていた争いがどうでもよくなるということも、またじつによく起きていることです。というよりも、人間関係の調整とは本質的にはそういうものです。はたしてそのような訂正が人工知能に可能でしょうか。

③ ぼくは、そのような力をもたないがぎり、人工知能の出現は人間のあいだのコミュニケーションの根幹を揺るがさないと考えています。

そして逆に、もしかりに人工知能が官能的な身体をもち、そのようなコミュニケーションの訂正まで可能になったとしたら、そのときはそれはもはや人間と本質的に変わらない存在になってしまい、かえって社会のありかたにも影響しないように思われます。だから、どちらにしろ、人間の問題はいまと変わらず残り続けると思うのです。

④ 以上を要約すれば、人工知能社会の到来で重要になるのは、むしろ「人間とはなにか」という問いだということになります。

さきほど ChatGPT の例を挙げましたが、いまは Stable Diffusion などのイラスト系生成 AI もすごい勢いで進化しています。いくつかのキーワードを入力するだけで、イラストを自動で生成してくれる。きわめて便利なのでコンテンツ産業に与える影響は甚大でしょう。そのうち動画も生成できるようになるでしょうし、おそらくは数年以内に、物語からキャラクターデザインからなら、すべて AI が担当したそれなりに高品質な映像作品が生み出されてくるのではないかと思います。

しかし重要なのは、そのとき人間がどう「感じる」かです。じつは人間は必ずしも質のいいコンテンツに感動するわけではありません。たとえば子どもの絵。ぼくは自宅に娘が小学生のころに描いた絵を飾っているのですが、これには芸術的な価値はまったくありません。にもかかわらずには価値がある。なぜか。それは娘が描いたからです。

これを難しい言葉で言えば「作家性」ということになります。じつは人間はコンテンツを消費するとき、その内容だけでなく、「それをつく

ったのはだれか」といった付加情報も同時に消費しています。それが作家性です。

ときにはその付加情報のほうが高い価値を生み出すこともあります。一枚の絵が何十億円という価格で取引されるアートマーケットは、まさにそのような世界です。作品だけなら、いくらでも複製できるかもしれない。でも「この絵が、あるとき、あの作家によって描かれた」という事実性は複製できない。だからそちらのほうにより高い価値が付加されるわけです。ちなみに言えば、その事実性をデジタルで再現しようとしたのが NFT です。

人間はじつは、コンテンツの中身と付加情報をとともに消費している。それはふだんは自覚していない。けれどもアートマーケットのような先鋭的な場所、あるいは自分の子どもの絵を飾るような極端な事例では明確に現れてきます。

そしてぼくは、良質なコンテンツが安価で無限につくられてしまう AI 社会においては、あらためて本体と付加情報のずれが問われてくると思うのです。要は、作家性がますます大事になってくるということです。

ここまで本書を読んできたかたはおわかりのとおり、これもまた訂正する力と関係しています。作家性を支えるのは、まさに「じつは……だった」という発見の感覚だからです。ぼくはさきほど、それを固有名における定義の変更の問題として説明しました。

目のまえに、稚拙な子どもものの絵がずらりと並んでいたとする。「ふーん」と無関心でいたところに、ある絵を指して「これはあなたのお子さんが描いたんですよ」と言われる。そうすると、突然すごくいい絵に見えてくる。だれしもそういう経験はあると思いますが、まさにそれこそが訂正の行為であり、作家性の感覚の萌芽です。

これはふしぎな感覚です。しかしそれは現実⑥に人間社会のなかで動いており、金も生み出している。ここに食い込まないかぎり、芸術は影響を受けません。

むろん、人間がつくっているコンテンツで、作家性とは無関係に流通しているものはたくさんあります。匿名で売れているものもある。とはいえ、そこに限界があることもたしかです。人工知能を使っていくら良質なコンテンツを生み出しても、「で、だれがつくった？」という物語が付加されないとあるていど以上売れない、金にならないということが現実として起こってくるのではないのでしょうか。

そのような「じつは……だった」の力を的確に分析することは、これからのビジネスで不可欠になると思います。

作家性という言葉は古臭いと感じたひともいるでしょう。実際、ぼくが学生のころには、思想界ではしきりと「作者の死」が語られていました。ポストモダン社会では、近代的な作家像は解体されるのだと言われたりもししていました。

けれども現実には、作者の死どころか、かつてなく作家性が重要になっていくという変化です。ツイッターにせよ YouTube にせよ TikTok にせよ、現代人は「ひと」にかつてなく関心をもっている。あるひとが魅力的だと思えば、多少コンテンツがダメでも平気で金を払う。

このような変化を、プロの業界の人間は軽視します。プロはコンテンツの質を重視するからです。小説家は大事なのはまず文章の質だと考えます。ミュージシャンは大事なのはまず音楽の質だと考えます。映像作家は大事なのはまず映像の質だと考えます。当然のことです。

でも現実には消費者はそう動いていない。どう見ても質の低いコンテンツにどんどん金を払っている。

かつてアテンションエコノミーということが言われました。注目を集めれば金が儲かるという意味の言葉ですが、ふたを開けてみれば、そこで注目の単位になったのは作品ではなく「ひと」だった。内容がいいから作品が売れている、などと信じているのはいまや一部の玄人^{くろうと}だけなのです。

これはどういうことなのか？ もっと原理的に考えなければいけません。これからは多くのひとがこの問題に直面することになる。生成AIが普及^{ふききやう}することで、いい文章やいい音楽やいい映像をつくるほうが簡単になってしまいうからです。プロの能力のほうがコモディティ化^{こもでい}しつつあるからです。

プロの能力が無料で利用可能で複製可能になってしまったら、金を払う対象は、プロかアマチュアかは関係なく、発信者の存在感だけになってしまふ。そういう点で、いまが文化産業の大きな転換点^{てんかんと}なのはまちがいありません。

〈東浩紀『訂正する力』（朝日新書）による。問題の作成上の都合により、見出しを省略した。〉

（注1）シンギュラリティ：人工知能が人間の知能を超える転換点のこと。

（注2）コモディティ化：一般化^{いっぱんか}。価値の高かった商品の市場価値が低下し、一般的な商品になること。

問1 ——— ①「落合さんはそれを人間の危機と感じていたようですが、ぼくは見かたが違っていました」とあるが、どういうことか。

最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間がやっていることのほとんどは人工知能でできるようになるものの、落合さんと違って筆者は、人工知能が人間の知能を超えることとで人間の生きかたが劇的に変わらな思っていないということ。

イ 人工知能が人間の知能を超えるときは必ず来るはずで、落合さんと違って筆者は、人工知能が人間のやっていることのほとんどを請け負うようになれば、人間の生きかたが豊かになると思っっているということ。

ウ 人間がやっていることのほとんどが人工知能でできるようになったとしても、落合さんと違って筆者は、人工知能が人間の知能を超えることはなく、これまでの人間のありかたが一変することになると思っっていないということ。

エ 人間がやっていることのほとんどは人工知能でできるようになるはずで、落合さんと違って筆者は、人工知能が人間の知能を超えるときに初めて人間の生きかたが劇的に変わり、そのことが人間に恩恵をもたらすと思っっているということ。

問 2

② 「歴史的に見れば、人間の脳が世界全体を理解できるという発想自体が、ここ300年か400年ぐらいのヨーロッパで生まれた幻想にすぎません」とあるが、筆者は「人間の脳」を何にたとえているか。これより前の本文中から抜き出して答えなさい。

問 3

本文中の には次のA～Cの文が入る。正しく並べ替えたものをあとのA～Eの中から一つ選び、記号で答えなさい。

A しかもどんなルールが変わっていくゲームです。

B そのダイナミズムを支えるのが訂正する力です。

C 社会はゲームです。

A A—B—C

I A—C—B

ウ C—B—A

E C—A—B

問 4

③ 「ぼくは、そのような力をもたないかぎり、人工知能の出現は人間のあいだのコミュニケーションの根幹を揺るがさないと考えています」とあるが、筆者はどのようなことを理由にこのように考えているのか。それを説明した次の文の に入る言葉を三十字以内で答えなさい。

現在の人工知能にはコミュニケーションの根幹にかかわる

ということ。

問 5

④ 「以上を要約すれば、人工知能社会の到来で重要になるのは、むしろ『人間とはなにか』という問いだということになります」とあるが、それはなぜか。その理由を説明したものとして最も適切なものを次のA～Eの中から選び、記号で答えなさい。

A 人工知能が人間に近づけば近づくほど、人工知能を開発する必要性が下がり、人間の本質を考えることに尽力する方が新たな社会の創造につながるようになるから。

I 人工知能が人間に近づけば近づくほど、人間の本質を考えた上で人工知能を発展させていかなければ、人間の問題を解決する近道にはならないから。

ウ 人工知能が人間に近づくということは、人間と人工知能が本質的に変わらない存在になるということで、結局人間の苦しみや悩みは解決されずに残り続けるから。

E 人工知能が人間に近づくということは、人工知能が人間を超える可能性がまだに残されているということであり、人間の新たな問題が生じるから。

問6

⑤ 「作家性がますます大事になってくるということですが、それはなぜか。その理由を説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア AI社会においては、人工知能が良質なコンテンツを無限に生み出してしまい、そのコンテンツと差別化するためには人工知能には複製できない付加情報に目を向ける必要が生じるから。

イ AI社会では、人間はコンテンツの中身と付加情報とともに消費しており、コンテンツの中身が安価に複製されるとともに付加情報により良質なものに付け替えられることで、その価値が高まるから。

ウ コンテンツが安価で無限に複製されるAI社会においては、人間がコンテンツの付加情報を中身とともに消費する限り、どれがオリジナルの付加情報を見分けなければならないから。

エ 人間と違って人工知能に付加情報の一つである事実性を複製できないという側面がある以上、AI社会では複製されたコンテンツに新たな付加情報を付与する必要があるから。

問7

⑥ 「それは現実に人間社会のなかで動いており、金も生み出している」とあるが、どういうことか。それを説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 文化産業において、人工知能によってコンテンツが無限に増え続ける状態であるため、特定の発信者が肯定的に宣伝するコンテンツが注目を集めるようになっていくということ。

イ 文化産業において、プロが作った良質なコンテンツは高価であるため、安価にもかかわらずプロのように質の高いコンテンツに対して消費者は金を払っているということ。

ウ 文化産業において、質の良さを重視して売っているのは一部の作品で、数少ない良質な作品が希少なものととして価値を持つようになっているということ。

エ 文化産業において、良い音楽や良い文章かどうかということに関係なく、消費者は発信者の存在感に価値を認めるようになっていくということ。

問8

本文を読んだ成城健児君は、本文の筆者とは別の視点から人工知能について述べた次の【資料】を図書室で見つけた。【資料】に続く（メモ）は、【資料】を読んだ成城健児君が本文と【資料】の内容をまとめたものである。【資料】を読んであとの各問いに答えなさい。

アート業界をよく知る関係者A氏からは、次のような意見もある。

「人工知能はカメラと似ているかもしれませんが、すなわち、人間がアート作品を生み出すためのひとつのツールであり、手段・手法でしかないという意味です。アート作品は、作家性や作品のクオリティ、来歴、希少性などさまざまなファクターによって値がつけられます。AIを使つたという話題性だけでは、それほど長続きしないと思います」

現在、巷では人工知能がさまざまな能力を獲得し、いずれ人間を超えていくのではないかという「AI脅威論」もしくは「万能論」がまことしやかに語られ続けている。特にアート分野では人間の「不可侵領域」とされてきた「創造性」がモノをいう分野。そこに「ついに機械が進出してきた」という恐怖心、あるいは好奇心を媒介にして、落札のニュースが世界を駆けめぐった。

しかし、現在の人工知能は少しばかりの自律性（自分で題材を選んで描写するなど）はあれど、あくまで人間の指示に従って作品を生み出しているに過ぎない。ある意味、ペンやカメラなどと同じようにツールの域を出ないのだ。それらの「AIができること」に対する認識レベルが「ごちゃごちゃ」になり、議論や報道が錯綜している感がある。だが、話を聞かせてくれたアート関係者たちの反応を冷静に総合すると、その熱はまだまだ一過性のもの。確固としたジャンルとして根付くほどの大きなムーブメントには至っていないというのが、嘘偽りない現実のようだ。

AI×アートの現在地は、写真（カメラ）の創成期に似ているのかもしれない。

当時、画家は現実を精密に写し取る写真というテクノロジーを前にして不要になるとも言われたそうだが、実際にはそうはならなかった。人間は写真に対抗するようにまた新たな表現技法を獲得し、絵画と写真は別のジャンルとして発展・定着していった。GANを超えるような新しいAI技術、もしくは本当に人間の能力を超えるような人工知能が生まれれば話は変わってくるかもしれないが、現段階ではAIアートも写真アートと同じような道をたどる可能性が高いのではないだろうか。

〈河鐘基「初出品作品が4800万円！どうなる？AIアートの真贋」『サイズ』二〇二〇年三月号（サイズ）による〉

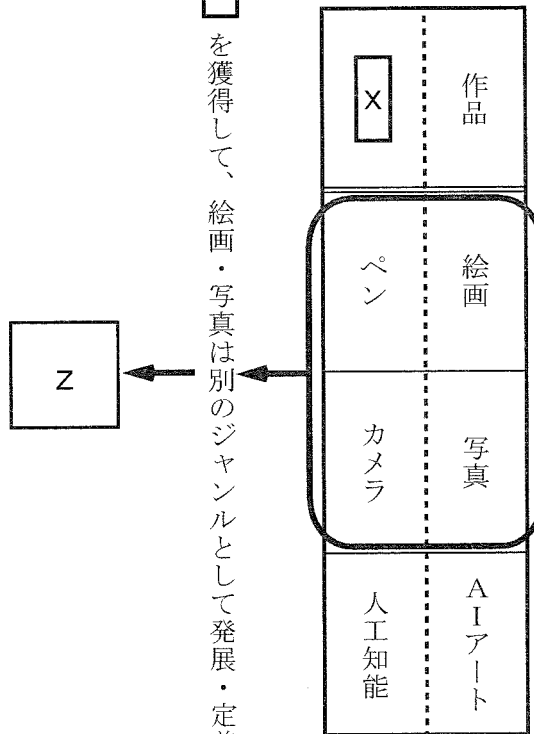
本文

- ・ 人工知能が進化しても、人間の生きかたは大きく変わらない。
- ・ AI社会におけるビジネスでは、「じつは……だった」の力を分析することが不可欠。
- ・ 現代人は作品ではなく「ひと」に関心を持っていて、人間がどう「感じる」かが重要。

【資料】

アート分野 || 人間の **W (三字)** が大切。

現在の人工知能は、人間の指示に従って作品を生み出すだけで **X (三字)** に過ぎない。



人間は新たな **Y (四字)** を獲得して、絵画・写真は別のジャンルとして発展・定着した。

(1) 〈メモ〉の **W** 〰 **Y** に入る言葉をそれぞれ指定の字数で【資料】の中から抜き出して答えなさい。

(2) 〈メモ〉の **Z** には、現段階でのアートの未来を成城健児君が考えた図が入る。その図として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

【三】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①「浩美なんて名前やだ！」

浩美が駄々を捏ねるようになったのは小学校に上がった頃だ。

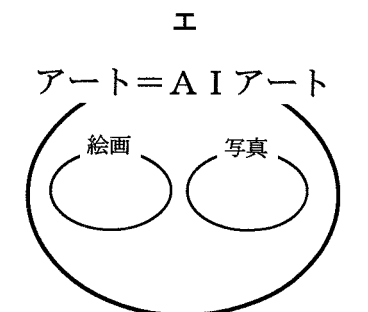
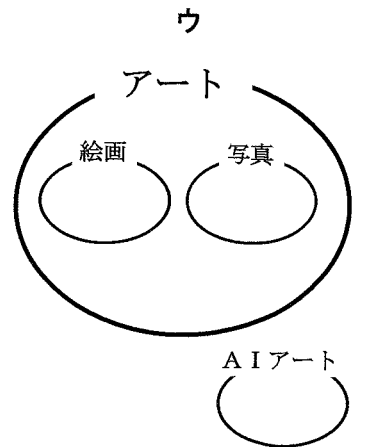
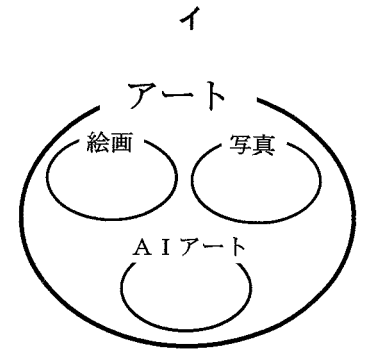
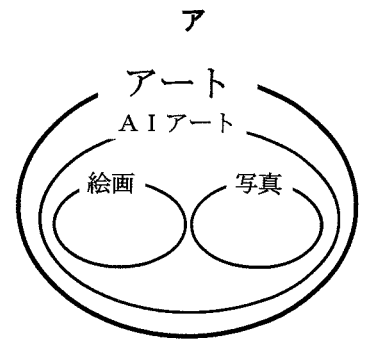
初めて出席を取ったとき、担任の先生が浩美の名前を女の子と間違えたり、桜庭浩美ちゃん、と呼ばわった後のフォローがまたまなかったという。

あらいけない。まるで女の子みたいにまづげが長くてかわいから間違えちゃった。

一発でクラス中から「浩美ちゃん」とからかわれることになって、浩美の自尊心は深く傷ついたというわけだ。だが、それより深く傷ついていたのはお父さんの心である。

「浩美なんて名前だいきらい！」

浩美が癩癧を起こす度、お父さんは泣きそうな顔になっていた。次男坊が生まれたとき、厳正なるじゃんけんで決まった「浩美」は、お父



さんが決めた名前だ。

「そんなこと言うなよ、いい名前なんだぞ。お母さんの字も入ってるんだから」

お母さんの名前は明美だ。昌浩のときは昌の字をお父さんの和昌から取ったので、次の子供は長男と浩の字がお揃いで、お母さんの美が入る
浩美にしようと決めていたらしい。

ヒロミなら男の子でも女の子でも使える名前だからどっちが生まれても大丈夫——と性別が分かる前から「満悦だったらしいが、

「男の子だったら明浩とか浩明でもよかったかもね」

きしりと笑うお母さんに、お父さんはますます泣きべそ顔になってしまった。

「せめて美浩にしなければよかったかなあ」

「うそうそ」

お母さんはしよげるお父さんの頭をなでた。

「両親の名前からそれぞれ二字目を取って、兄弟で浩がおそろい・しりとり。家族の名付けの法則が見えやすいもの、いい名前だと思うわよ」

「よくないっ！」

せつかくのお母さんの執り成しも浩美が叩き潰してしまう。

「ぼく、浩太の名前のほうがよかった！ 浩太と取りかえっこする！」

急に自分にお鉢が回ってきたので、浩太は面食らった。喧嘩に巻き込まれるなんてまっぴらごめんだ。

「浩太だったら男の子の名前だもん。お母さんだって、ぼくが生まれたとき浩太ってつけるつもりだったんでしょ」

お父さんはとうとうしよんぼりして部屋を出て行ってしまった。

「あーあ、お父さんかわいそう」

昌浩が聞こえよがしに言うのと、浩美は少し気持ちが怯んだようだが、昌浩はその後の一手を間違えた。

「浩美、悪い子だなー」

「悪くないっ！」

③ あっという間に意固地が逆戻りだ。

「浩太と名前取りかえる！」

「だーめ」

お母さんは一向に取り合わない。

「六年も浩太の名前だったのに、急に変わったら浩太だって困るでしょ」

「困らないよ。浩太、猫だし」

「猫だからこっちの勝手にしていいなんて子、お母さんきらいよ」

お母さんの「きらい」はこたえたらしい、浩美はむっつりと黙り込んだ。浩太が下から覗き込むと、ふいと目を逸らして、ちよっぴり涙ぐんでいるようだ。

お母さんもちよつと言いつつと思つたのか、浩美をよしよしと抱っこした。

「浩太だって浩太って呼ばれて六年間かわいがられてきたんだから。みんなの愛情が詰まった名前を取り上げたらかわいそうでしょう」

浩美は今ひとつ要領を得ていない顔だ。

「浩美の名前だって家族みんなの六年分の愛情が詰まってるのよ？ 浩美はお母さんの愛情も捨てちゃうの？」

えーんえーんと嘔泣きをしたお母さんはとんだ大根だったが、浩美は「ちがう！」と大慌てだ。

浩美は完全に納得したわけではなかったようだが、とにかくお母さんを泣かせてはいけなかつたのか、しぶしぶ聞き分けた。

Ⅲ まったく たかが名前一つで大騒ぎだね人間は。浩太が肩をすくめると、ダイアナが心得ている様子で笑つた。

人間にとつては名前つて、とっても大事なことなのよ。わたしの名前をつけるときだつてお父さんとお母さんは大騒ぎだったんだから。

ダイアナが桜庭家の猫になつたのは、昌浩が生まれるよりも前の話だという。

そのときもお父さんとお母さんはじゃんけんしたのよ。

ダイアナというのはお母さんが好きな『赤毛のアン』という本に出てくる登場人物の名前だ。それに対してお父さんは別の名前を推していた。

フラマ？ おかしな名前だね。

お父さんとお母さんが新婚旅行で泊まつた外国のホテルの名前なんですつて。

お父さんがダイアナをもらつてきたのは、ちょうど新婚旅行から帰つてまもない頃だったそう。

新婚旅行の思い出を猫の名前に残したかったらしいが、お母さんのほうはといえばそのホテルで部屋の鍵を置き忘れ、閉め出されてしまったことが深く残つていたようで、そんな思い出を残すのはイヤだとダイアナを推したという。

昔からお父さんはロマンチストなのね。

次男の名前に長男のときの自分と同じ形で奥さんの字を入れたい、というのは確かになかなか甘つたらい。

お父さんはその晩、浩美の部屋にやってきて、ものすごく悲壮な決意を固めた顔で口を開いた。

「あのな、浩美。今すぐ名前を変えることはできないんだけど、大人になって浩美がまだ自分の名前がイヤだったら、裁判所に届け出て許可が

出たら変えることができるんだって。だから今すぐには無理だけど、大人になってからもう一度考えないか？」

浩美のベッドの足元に寝ていた浩太は、鼻先で浩美の足をつんつんついた。

Ⅳ
ほらほら、起きてるんでしょ。名前、変えなくていいよって言ってやりなよ。

お友達にからかわれるくらい大したことないってほんととは分かってるんでしょ。

浩美は浩太の頭を爪先でうるさげに押しつけたので起きているはずだが、お父さんには寝たふりを決め込んでいた。

そんな名前騒動がばたりと収まったのは、夏休みに遊びにきた従姉のさつきちゃんのおかげだ。

中学校の一年生だったさつきちゃんは美人で優しく、桜庭家の子供たちはさつきちゃんのことが大好きだった。

昌浩と浩美は当然さつきちゃんの取り合いになり、何かにつけて張り合った。いいところを見せようと張り合っているうち、たまに喧嘩になつてしまう。

一体何の拍子だったやら、そのときは浩美が名前についてずっと駄々を捏ねていることを昌浩があげつらった。

「何だよ、先生に浩美ちゃんと呼べたくらいでうじうじしてるくせに」

決まりの悪さで、浩美の顔は真つ赤になった。昌浩にほかほか殴りかかり、昌浩も負けるものかと受けて立ち、あつというまに取っ組み合いになってしまった。

仲裁にやってきたさつきちゃんは、口々に我が言い分を訴える子供たちの話を順番に聞いて、不思議そうに浩美に尋ねた。

「浩美くんは自分の名前がきらいなの？」

だって、と浩美は歯切れ悪く俯いた。

「女の子の名前だって笑われるから」

「わたしは浩美って名前、好きだけどなあ」

そしてさつきちゃんのははにかんだように笑った。

Ⅴ
「わたしが幼稚園のとき初めて好きになった男の子も、ヒロミって名前だったんだ。字は違うんだけど」

九回裏逆転サヨナラホームラン！——という勢いで浩美には劇的に利いた。

さつきちゃんが初恋のヒロミくんのことを、とつてもかっこよくてステキな男の子だったと話したからなおさらだ。

「たまたまおんなじ名前だったただけだからな！別にさつきちゃんの好きな人が浩美ってわけじゃないんだぞ！」

⑦
昌浩が何度も水を差したが、そんなことは何のその、浩美は上機嫌だった。

「助かったわあ」

お母さんが苦笑しながらさつきちゃんを拝んだ。

「お友達にからかわれたのがよっぽど嫌だったみたいで、けっこう引きずっちゃってたのよ。お父さんはしよげちやうし」

「じゃあ、お父さんにもごめんねって言わなきゃね」

さつきちゃんに諭され、浩美は氣まづかったのか「また今度」とごまかして逃げてしまった。

しかし、浩美が名前のご機嫌なめになることはなくなった。浩太と名前を取りかえたい、と言いつくことも。

新学期が始まってから、友達にからかわれることもなくなったらしい。要するに、浩美がむきになるからみんな面白がっていただけなのだ。

浩美が頓着しなくなったからかわれることもなくなったようだ。

さつきちゃんは浩美に自分の名前が素敵だと教えてくれた恩人ということになる。——ずっとしよんぼりしていたお父さんにとっても。

〈有川ひろ『みとりねこ』（講談社文庫）による〉

問1 ——— ① 「浩美なんて名前やだ！」とあるが、なぜ浩美はこのような発言をしたのか。その理由としてあてはまるものを次のア～オ

の中から**全て**選び、記号で答えなさい。

ア 先生に女の子の名前と間違えられたから。

イ じゃんけんで決められたから。

ウ お母さんに名付けてもらいたかったから。

エ 先生に容姿まで女の子のようだと言われたから。

オ クラスの中からかわれたから。

問2 ——— ② 「浩太は面食らった」とあるが、それはなぜか。その理由を説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から選び、

記号で答えなさい。

ア 人間の名前のことは自分には関係ないので高みの見物を決め込んでいると、猫である自分の名前が不意に出てきたから。

イ 浩太は自分の名前に愛着があったのに、猫である自分の名前と取りかえると浩美が身勝手に言い張ったから。

ウ 人間の名前には家族の愛が込められているものと感心していたのに、その名前を浩美が嫌がったから。

エ 猫である自分の名前を巡ってお父さんと浩美が争っていると思うていたら、お母さんまで巻き込まれそうになったから。

問3

③「あつという間に意固地が逆戻りだ」とあるが、ここに至るまでの出来事と浩美の心情の変化について説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 名前を変えたいという気持ちをわかってもらえずに腹を立てていた浩美は、しょんぼりした父の姿を見て怒りは収まったが、引くに引けず怒っているように装っている。

イ 名前のことで母の慰めも効かないほど腹を立てていた浩美は、「お父さんかわいそう」と言われて一瞬後ろめたさを覚えたものの、兄に「悪い子だ」とからかわれて怒りが再燃している。

ウ 「せめて美浩にしなければよかったかなあ」という父の言葉から名前を変えられるかもしれないと期待して、さらに父に追い打ちをかけようとしたが、その魂胆を兄に見抜かれて逆上している。

エ 両親のやりとりを聞いているうちに、自分の名前にも深い意味があることを理解したものの、浩太という名前にこだわる姿勢を兄に批判されたことに反発して、自分の言い分にこだわるようになっていく。

問4

④「ものすごく悲壮な決意を固めた顔で口を開いた」とあるが、この時のお父さんの心情として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 頑張った考えた名前を息子本人に馬鹿にされて憤りを感じている一方、親である以上は、その憤りを息子には隠しておきたいという気持ち。

イ 良い名前だと思っていたが、周りの人たちが言うように女の子みたいな名前だということに気づいたので、別の名前に変えてあげたいという気持ち。

ウ 息子が落ち込んでいる以上、親としての気持ちがこもった名前を変えようと提案するのはつらいけれども、この場をしのぐためには仕方がないという気持ち。

エ 自分が一生懸命考えてつけた名前だとはいえ、当の本人が気に入っていないのならば、自分の思い入れよりも息子の意思を尊重してあげなければならないという気持ち。

問5

⑤「お父さんには寝たふりを決め込んでいた」とあるが、この時の浩美の心情を説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 名前に対する「お父さん」の思い入れや自分への愛情を理解しながら、それを素直に受け入れられずどうしたら良いかわからなくなっている一方で、やはり「お父さん」への不満は残っている。

イ 「お父さん」に対して名前の中で文句を言ったのを過ちだと理解しているものの、友達にからかわれるつらさに共感してくれない「お父さん」に対していらだっている。

ウ 思い入れのある名前を変えても良いという「お父さん」の愛情を嬉しく思う一方で、それを受け入れると自分の負けを認めるように引くに引けず、「お父さん」からの提案にどう答えれば良いか思案している。

エ 「お父さん」に対して名前の中で文句を言ったのは悪かったと思っっているものの、単純にじゃんけんで名前を決めたことを謝らない「お父さん」に対する怒りがくすぶっている。

問6

⑥ 「浩美の顔は真っ赤になった」とあるが、それはなぜか。その理由を具体的に四十字以上五十字以内で答えなさい。

問7

⑦ 「昌浩が何度も水を差した」とあるが、それはなぜか。その理由を説明したものととして最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア さつきちゃんの初恋の相手と浩美が同じ名前だと知り、名前の中でうじうじする浩美を馬鹿にしたことを後悔しているから。

イ さつきちゃんが好きなのはあくまでも名前だと念押しすることで、浩美が勘違いしないように気遣っているから。

ウ さつきちゃんの初恋の相手と浩美が同じ名前で、さつきちゃんが好きな名前だと聞いて、浩美にやきもちをやいているから。

エ さつきちゃんの好きな名前が浩美だったとわかって、自分の名前が浩美ではないことを恨んでいるから。

問8

⑧ 「お母さんが苦笑しながらさつきちゃんを拝んだ」とあるが、この時の「お母さん」の説明としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さつきちゃんに褒められるだけでこうも簡単に態度を変えてしまう息子の幼さにあきれている。

イ たわいもない家族のもめごとにさつきちゃんを巻き込んでしまったことを申し訳なく思っている。

ウ さつきちゃんの前で兄と張り合おうとむきになる息子の様子を恥ずかしく感じている。

エ 自分がなだめても変わらなかった息子の態度を一瞬で変えたさつきちゃんへの嫉妬心を隠そうとしている。

問9 本文中の浩太に関する表現と内容についての説明として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア ～～～～Ⅰ「らしい」・～～～～Ⅱ「という」などの伝聞の表現が本文中の所々に用いられているのは、物語全体を通して浩太の視点から描かれて^{えが}いることによっている。

イ ～～～～Ⅲ「まったく、たかが名前一つで大騒ぎだね人間は」のように猫の発言部分に「」がないのは、猫が人間とは異なつて物事を客観的に見ているという印象を^{あた}与えるためである。

ウ ～～～～Ⅳ「ほらほら、起きてるんでしょ。名前、変えなくていいよって言つてやりなよ」とあるように、家族の中で浩太だけが浩美に対して遠慮^{えんりよ}せずに何でも言える存在として描かれている。

エ ～～～～Ⅴ「九回裏逆転サヨナラホームラン!」という部分は、浩太が浩美のことを本気で応援^{おうえん}している身近な存在で、浩美の喜びを代弁していることを表すものである。

問
9



※文字はていねいにはつきりと書くこと

【一】

問 1	① すみ	② 沿 っ て	③ 額	④ 武 運	⑤ 仏 閣
	炭	ソ っ て	ヒ タ イ	ブ ウ ン	ブ ッ カ ク

②×5

問 2	A オ	B ア	C エ
-----	-----	-----	-----

完答②

問 3	ア
-----	---

②

問 4	イ
-----	---

②

問 5	① ウ	② イ
-----	-----	-----

②×2

【二】

問 1	ア
-----	---

④

問 2	欠陥だらけの計算機
-----	-----------

④

問 3	エ
-----	---

④

現在の人工知能にはコミュニケーションの根幹にかかわる

問 4	す る た め の 人 間 と 同 じ よ う な 身 体 が な い	訂 正 す る 力 を 発 揮

⑥

ということ。

問 5	ウ
-----	---

④

問 6	ア
-----	---

④

問 7	エ
-----	---

④

【三】

問 1	ア・エ・オ
-----	-------

完答④

問 2	ア
-----	---

④

問 3	イ
-----	---

④

問 8	(1) W 創 造 性	X ツ ー ル	Y 表 現 技 法	(2) イ

②×3

④

問 6	か 昌 浩	っ 浩 の	た から 不	か ら 甲	。 ら 斐	な さ を	ま 好	っ き な	た さ つ	こ と き	が ち	恥 ず や	か し ん

⑧

問 7	ウ
-----	---

④

問 8	エ
-----	---

④

問 9	ア
-----	---

④

/100			
------	--	--	--

受 験 番 号			

座 席 番 号			